

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月1日現在

機関番号：64401
 研究種目：基盤研究（A）
 研究期間：2009年度～2012年度
 課題番号：21242034
 研究課題名（和文） 物質文化を通じた新たなアフリカ像の構築
 —国際協働による在来知と外来知の体系的検証
 研究課題名（英文） Reconstructing the History of Africa through Material Culture

 研究代表者
 吉田 憲司（YOSHIDA KENJI）
 国立民族学博物館・文化資源研究センター・教授
 研究者番号：10192808

研究成果の概要（和文）：

本研究計画は、アフリカ諸文化が生み出したモノ、すなわち物質文化に改めて焦点を当て、そこに埋め込まれた歴史過程を比較研究により洗い出すことで、アフリカについての新たな知見を提示することをめざした。本研究により、アフリカの諸文化が外部世界との絶えざる交流の中で形成されてきたことを跡づけることができ、さらにはその成果を公開シンポジウムや展示を通じて逐次公開することによって、いわば開かれた大陸としての「新たなアフリカ像」を実践的に提示することができた。

研究成果の概要（英文）：

The project aimed at presenting new perspectives on the formation of African cultures through comparative analysis of material culture of the continent. By carrying out the project, we could clarify the fact that African cultures are formed through continuous contacts with outside world, and actually presented new aspects of the history of Africa by publicizing the result in exhibitions and symposia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	9,200,000	2,760,000	11,960,000
2010年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
2011年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
2012年度	9,400,000	2,820,000	12,220,000
	35,200,000	10,560,000	45,760,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学／国際研究者交流／多国籍／物質文化／アフリカ／文化接触／博物館

1. 研究開始当初の背景

従来のアフリカの歴史についての知見は、サハラ以南のアフリカに固有の文字が存在しなかったことから、口頭伝承と、ヨーロッパ人旅行者やアラブ系の商人ら、外部からみた文字情報、それにわずかな考古学的遺物に基づいて構成されてきた。そこでは、実際に

アフリカ各地に伝えられている物質文化の研究には副次的な位置づけしか与えられてこなかった。しかも、これまでにおこなわれたアフリカの物質文化研究は、欧米の価値観に基づく美術史的研究もしくは技術的な研究にとどまっており、それに基づいてアフリカの現在と歴史についての認識そのものを問い直すという、総合的視点は欠落していた。

2. 研究の目的

本研究計画では、現在のアフリカに遺存する具体的なモノ、すなわち物質文化の徹底的な精査により、そこに埋め込まれた歴史過程を洗い出すことで、アフリカの在来知・技術と外来知・技術の絡まり合いを解きほぐし、アフリカの内的発展と外世界交渉の関係について新たな知見を提示することを目的としている。

3. 研究の方法

(1) ナイジェリア、カメルーン、エチオピア、ケニア、タンザニア、ザンビア、南アフリカ、マダガスカルの8カ国の研究機関・博物館を現地研究拠点とし、その機関の研究プロジェクトの一環として共同作業を実施することで、物質文化とそれをめぐる在来知・外来知の面的拡がり相互に確認し、共有していった。

拠点とした研究機関・博物館は以下のとおりである。

- ・ナイジェリア大学総合芸術学部
- ・バフツ王宮博物館 (カメルーン)
- ・エチオピア研究所
- ・ケニア国立博物館
- ・タンザニア国立博物館
- ・ザンビア国立博物館機構
- ・ウィットウォーターズランド大学美術館 (南アフリカ共和国)
- ・アンタナナリヴォ大学美術考古学博物館 (マダガスカル)

(2) 各地域の物質文化については、研究計画期間前半に実施した現地調査を通じて、当該地域文化の歴史的展開の指標となる事象を絞り込み、研究計画後半の期間においてその事象についての集中的な調査を実施するというかたちで研究を進めた。指標となったのは、仮面や彫刻、ビーズ (ガラス)、製鉄、染織から現在の日常雑貨交易品にまで及んだ。

(3) 合わせて、欧米に残された、アフリカとヨーロッパの接触初期、すなわち 15 世紀から 16 世紀にかけてヨーロッパ人の手でアフリカにおいて収集され、その後欧米に持ち帰られた物質文化の所在・資料情報調査も実施した。それらの物質文化資料と現在のアフリカにみられる物質文化の比較を通じて、当時のアフリカとヨーロッパの接触のあり方が、その年代の特定も含め、具体的に明らかとなってきた。

4. 研究成果

(1) アフリカ文化の歴史的展開を跡づけるうえでの指標として取り上げた事象は、仮面や彫刻、ビーズ (ガラス)、製鉄、染織から現在の日常雑貨交易品にまでおよび、きわめて多様であるが、そのいずれからとも、アフリカの諸文化が外部世界との絶えざる交流のなかで形成されてきたことを跡づけることができた。

① 仮面文化については、アフリカ大陸全体の仮面文化の広がりを把握するとともに、仮面の造形に、ヨーロッパ人の形象やヨーロッパ由来の文化要素が組み込まれる事例をアフリカ各地で確認し、いわば「異界」の表象として、仮面が外来の文化要素をいち早く取り入れるメカニズムをもっていることを確認した。

② ビーズについては、国立民族学所蔵資料と、アフリカ各地での現地調査により、アフリカ西海岸に関して、地中海産のサンゴやヨーロッパ製ガラスビーズが、初期にはサハラ越えの交易、15 世紀以降はヨーロッパ人による沿岸交易を通じてアフリカに大量に供給され、それが再生ビーズとして繰り返し使われていく過程を明らかにした。一方、東海岸については、初期には、インド洋交易、そして 19 世紀以降はヨーロッパ人との接触のなかでビーズ文化が普及していく過程を再構成できた。アフリカのビーズ文化は、アフリカと外部世界の交流の軌跡を映し出していることが明らかになった。

③ 製鉄については、アフリカ各地で製鉄遺構の存在を確認し、バントゥ系諸民族の拡大の経路に合わせた製鉄技術の広がりについて、一定の見通しを得ることができた。

④ 染織については、エジプト、エチオピアでの現地調査の成果と西アフリカでの研究成果との比較から、アフリカにおける「編み」から「織り」への展開についての見通しを得るにいたった。

⑤ 物質文化の現代的展開についても、UNESCO の世界遺産指定の有形・無形の文化遺産への影響を各地で評価するとともに、伝統的物質文化のツーリスト・アートへの展開 (マダガスカル、ザンビア、ケニア、カメルーン、マリ)、世界のアート・シーンへの進出 (ナイジェリア、ガーナ)、輸入日用雑貨品との置き換わりとその移動 (タンザニア、マラウイ)、内戦後の平和構築への応用 (モザンビーク) など、多様な動きについて、そ

れぞれの実態と課題の把握を進めた。

(2) 本計画の特徴のひとつは、調査の進展に伴う研究成果を、シンポジウムと展示というかたちで、極めて迅速に公開したという点にある。

① 2009年7月から9月まで、MOA美術館で開催された特別展「アフリカ的美—ピカソ、モディリアーニたちを魅了した造形」(特別協力・国立民族学博物館)において、仮面、木彫、染織に関する本研究活動の成果の一部をいち早く組み込み、公開した。

② 2010年9月から11月にかけて、研究分担者の川口幸也の担当で、国立民族学博物館(民博)において、「彫刻家エル・アナツイのアフリカーアートと文化をめぐる旅」を開催し、上記の、在来の生活文化を背景に展開する現代美術の様相を、エル・アナツイという、現代アフリカ美術界を代表する作家の活動の中に紹介した。この展示は、その後、神奈川県立近代美術館、埼玉県立近代美術館、鶴岡アートフォーラムへも巡回している。

③ 2012年2月には、国際シンポジウム「アフリカを展示する—ミュージアムにおける文化の表象・再考」を国立民族学博物館にて開催し、海外共同研究者を日本に招聘して、アフリカ各地の物質文化の歴史的・現代的展開について研究を集約するとともに、それをうけた日本におけるアフリカ文化の表象のありかたを検討した。

④ 2013年5月に、民博で日本アフリカ学会第49回学術大会を開催するのに合わせ、民博機関研究と本研究計画の共同事業として、国際シンポジウム「アートと博物館は社会の再生に貢献しうるか?」を開催した。これは、内戦後のモザンビークにおいて進められている、民間に残された武器を回収し、その武器でアートの作品を制作し、平和構築を進めるというTAE(Transfomação de Armas em Enxadas / Transforming Arms into Plowshares)「銃を鋤に」の活動に焦点をあてたもので、アートや博物館の平和構築に向けた可能性を検証するものであった。なお、そこでの議論の成果は、本研究計画の終了後ではあるが、2013年7月から11月まで国立民族学博物館にて開催する企画展「武器をアートに—モザンビークにおける平和構築」で公開することとしている。

⑤ 2013年8月から10月にかけて、本研究成果の公開の一環として、神奈川県立近代美術館・葉山にて、「国立民族学博物館コレクション ビーズ・イン・アフリカ」(主催・神奈川県立近代美術館、共催・国立民族学博

物館)を開催し、とくにビーズに焦点をあてて、アフリカにおける在来のビーズ製作と、外部世界との交流によって成立したビーズ文化の多様な姿を明らかにした。

⑥ 2013年3月から6月にかけては、連携研究者・飯田卓の担当で、国立民族学博物館において特別展「マダガスカル 霧の森の暮らし」を開催し、マダガスカルの木彫技術の史的展開についての研究成果を広く公開した。

(3) 以上のように、本研究は、アフリカ全域を視野におさめる俯瞰的な視覚を維持しつつ、現地研究拠点の長所を生かして、モノの製作や使用に関する綿密なフィールドワークを実施し、アフリカの物質文化とモノづくりをめぐる複合的な体系を明らかにするとともに、その成果を公開シンポジウムや展示というかたちで公開することによって、「物質文化を通じた新たなアフリカ像」を実践的に提示するものとなった。

従来、閉ざされた大陸というイメージの強かったアフリカであるが、本研究を通じて浮かび上がってきたのは、アフリカの文化が絶えざる外部世界との交流するなかで育まれてきたものだという点であり、いわば「開かれたアフリカ」の姿が明らかになった。その認識をアフリカの内外で広く共有することは、個々の地域の文化の再評価を進めるとともに、偏狭なナショナリズム形成に結びつくのではない、より開かれたアイデンティティを広く醸成するのに寄与するものと確信している。

本研究計画自体は、平成15年3月をもって終了したが、これらの成果は、今後、出版事業やアフリカでの展示の活動を通じて、アフリカに還元することを予定している

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計29件)

吉田憲司 2013 「フォーラムとしてのミュージアム、その後」『民博通信』[査読有] 140号、pp.4-7.

井関和代 2013 「編みから織りへ—エチオピアの<篩>づくりを事例に」大阪芸術大学紀要『藝術』[査読有] Vol.35、採択済

川口幸也 2013 「非西洋の美術—多文化共生の時代」京都造形芸術大学・東北芸術工科大学編『芸術史—近現代(下)』、芸術学舎出版 近刊、当該頁未定

吉田憲司 2012 「ビーズに見るアフリカの文化」 吉田憲司・水沢勉・池谷和信共著『ビーズ・イン・アフリカ』、神奈川県立近代美術館、pp. 98-105.

吉田憲司 2012 「人はなぜ仮面をかぶるのか—仮面という装置が明かす人類の普遍性」 『嗜み』17号、pp. 64-69.

吉田憲司 2012 「仮面という装置・再考—人はなぜ、もうひとつの顔をつくるのか」 仲里なぎさ、金城美奈子編『旅する仮面』、沖縄県立博物館・美術館、pp. 90-93.

慶田勝彦 2012 「キベラ・レッシン—ケニアにおける土着性とヌビのアイデンティティ」 太田好信編『政治的アイデンティティの人類学』昭和堂、pp. 78-133.

飯田 卓 「経験を受け継ぐということ—マダガスカル漁村から」 『民博通信』[査読有] 136号、pp. 2-7.

飯田 卓 2012 「漁師と船乗り—マダガスカルとモザンビークにおける漁村伝統の対照性」 松井健・野林厚志・名和克郎編『生業と生産の社会的布置—グローバル化の民族誌のために (国立民族学博物館論集1)』岩田書院、pp. 125-148.

飯田 卓 2012 「マダガスカル船、造船、操船—シングル・アウトリガー式カヌーを中心にみた技術交流」 飯田 卓編『マダガスカル地域文化の動態』(国立民族学博物館調査報告 103)、pp. 101-147.

吉田憲司 2011 「文化遺産の返還をめぐる世界の動き 2010」 日韓歴史家会議組織委員会 編『「歴史を裁く」ことの意味』(第10回日韓・韓日歴史家会議報告書) 財団法人 日韓文化交流基金、pp. 75-86.

井関和代 2011 「薬用植物の利用と〈自然観〉について—北部ヴェトナム・サパ県におけるザオ社会を事例に」 大阪芸術大学紀要『藝術』[査読有]、Vol. 33, pp. 23-39.

川口幸也 2011 「珍奇人形から原始美術へ—非西洋圏の造形に映った戦後日本の自己像」 『国立民族学博物館研究報』[査読有]、36(1)、pp. 1-34.

慶田勝彦 2011 「医療と悪—ケニア海岸地方における伝統医療者の専門職化とその座礁」 高橋隆雄・北村俊則編『医療の本質と変容—伝統医療と先端医療のはざままで』九

州大学出版会、pp. 356-378.

飯田 卓 2011 「海をめぐる無形の資本—マダガスカル漁村から資源管理論を問い直す」 松本博之編『海洋環境保全の人類学—沿岸水域利用と国際社会 (国立民族学博物館調査報告 97)』、pp. 73-90.

吉田憲司 2010 「民族誌記述の転換点に立ち会う」 谷泰、田中雅一編『人類学の誘惑 京都大学人文科学研究所社会人類学部門の50年』、京都大学人文科学研究所、pp. 44-45.

ISEKI, Kazuyo 2010 “Use of Fibers in Africa”, *Fiber Plants of Africa and their Usage*, JAICAF (Japan Association for International Collaboration of Agriculture and Forestry), pp.4-13.

慶田勝彦 2010 「スピリチュアルな空間としての世界遺産—ケニア海岸地方・ミジケンダの聖なるカヤの森林—」、石井美保他編『宗教の人類学』、春風社、pp. 239-271.

亀井哲也 2010 「ングニ系民族の物質文化比較研究—博物館収蔵資料から見る南部アフリカ・バントゥ諸民族の拡大の歴史 その2」 『高梨学術奨励基金年報：平成21年度研究成果概要報告』、pp. 248-255.

IIDA, Taku 2010 Foraging for Development: A Comparison of Food Insecurity, Production, and Risk among Farmers, Forest Foragers, and Marine Foragers in Southwestern Madagascar. Bram Tucker, Mr. Tsimitamby, Frances Humber, Sophie Benbow, *Human Organization* 62 (4), pp.375-386.

飯田 卓 2010 「ブリコラージュ実践の共同体—マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」、『文化人類学』75(1)、pp. 60-80.

飯田 卓 2010 「交易の島から展望する「三つの生態学」—東アフリカ、ムワニ世界の漁師たち」、木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学学術出版会、pp. 77-98.

吉田憲司 2009 「『アフリカ的美』に眼をこらす」 吉田憲司、内田篤呉、河野泰典(編) 『アフリカ的美—ピカソ、モディリアーニたちを魅了した造形』 M O A 美術館、pp. 6-15.

吉田憲司 2009 『仮面と動物—儀礼の中に

生きる動物たち』奥野卓司・秋篠宮文仁編「ヒトと動物の関係学」第1巻『動物観と表象』岩波書店、pp. 115-132.

井関和代 2009 「アフリカの繊維利用」『アフリカの繊維植物とその利用』（途上国支援のための基礎的情報整備事業・調査研究叢書）、Vol. 27, pp. 7-30.

川口幸也 2009 「博物館と美術館—文化を語る二枚舌の構造」木下直之編『芸術の生まれる場』東信堂、pp. 36-47.

飯田 卓 2009 「涙を断ち切る文化—マダガスカル南西部ヴェズ社会における死者への態度」今関敏子編『涙の文化学』青簡舎、pp. 89-103.

飯田 卓 2009 「マダガスカル 2009 年の政治危機—その背景と経過」『Serasera』Vol. 21, pp. 39-42.

〔学会発表〕（計 16 件）

YOSHIDA, Kenji 2013 'Can Art and Museums Contribute to the Renaissance of Society?', International Symposium 2012 "Can Art and Museums Contribute to the Renaissance of Society?", held at National Museum of Ethnology, Osaka, on 26 May.

YOSHIDA, Kenji 2012 "The Museum, a Platform for the Intangible Cultural Heritage", International Research Symposium 'Museums and Intangible Heritage', held at the National Folk Museum of Korea, Seoul, Korea on 28-29 August.

YOSHIDA, Kenji 2012 "Making the New Africa Gallery at Minpaku, National Museum of Ethnology", International Colloquium 2012 "Exhibiting Africa: Contemporary Perspectives on the Representation of Cultures of Museums," held at National Museum of Ethnology, Osaka, Japan on 17-18 February.

飯田 卓 2011 「マダガスカル森林部の木材利用—カヌー材と建材の供給にまつわる問題」日本アフリカ学会第48回学術大会、弘前大学、5月21-22日。

吉田憲司 2011 「博物館と教育—地域コミュニティとの連携」国際フォーラム「民俗/民族文化的教育と博物館」、国立台北芸術大学（台湾）、9月4-7日。

吉田憲司 2010 「博物館という装置・制度の成立とナショナリズム 南山大学オープン・リサーチ・センター・シンポジウム「博物館とナショナリズム」、南山大学、11月13日。

吉田憲司 2010 「文化遺産の返還をめぐる世界の動き 2010」第10回日韓・韓日歴史家会議 はあといん乃木坂、東京、10月29-31日。

吉田憲司 2010 「新しいアフリカ展示（フォーラム「民博展示新構築の評価を試みる」）」日本展示学会第29回研究大会、国立民族学博物館、6月19日。

KEIDA, Katsuhiko 2010 "Still a 'Sacred Void'?: The Invention of Natural Forests and Rethinking of Semantic Aspects of the Kayas of the Kenyan Coast", "An Africanist's Legacy: A workshop in celebration of the work of David Parkin" held at Pauling Centre for Human Sciences, Oxford, UK, on 8-9 July.

栗田 和明 2010 「タンザニア人交易人のザンビア、マラウイでの活動」日本アフリカ学会第47回学術大会、奈良県文化会館、5月29-30日。

吉田憲司 2009 「民族誌展示の現在 2009」、国立民族学博物館国際シンポジウム「21世紀の人類学と民族学博物館」、国立民族学博物館、12月18日。

井関和代 2009 「編みから織りへ—エチオピアの「篩」づくりを事例に」日本アフリカ学会第46回学術大会、東京農業大学、5月23-24日。

亀井哲也 2009 「地名再考運動—南アフリカ、ンデベレの事例を中心に—」日本アフリカ学会第46回学術大会、東京農業大学、5月23-24日。

栗田和明 2009 「タンザニア人交易人の東南アジアでの活動—広州、香港、バンコクを比較して—」日本文化人類学会 第43回研究大会、大阪国際交流センター、5月29-31日。

栗田和明 2009 「東部アフリカにおけるタンザニア人交易人の活動—タンザニア・ザンビア・マラウイを結んで—」日本アフリカ学会 第46回学術大会、東京農業大学、5月23-24日。

飯田 卓 2009 「ブリコラージュ実践の共同体」日本文化人類学会第43回研究大会、大

阪国際交流センター、5月29－31日。

〔図書〕(計12件)

吉田憲司 2013 『文化の「肖像」－ネットワーク型ミュージオロジーの試み』岩波書店、pp. 241.

飯田卓(編) 2013 『「霧の森の叡智－マダガスカル、無形文化遺産のものづくり」国立民族学博物館、pp. 148.

飯田卓・深澤秀夫・森山工(編) 2013 『マダガスカルを知るための62章』明石書店、pp. 368.

吉田憲司・水沢勉・池谷和信『ビーズ・イン・アフリカ』神奈川県立近代美術館、2012、pp. 158.

飯田卓(編) 2012 『マダガスカル地域文化の動態』(国立民族学博物館調査報告 103)

吉田憲司(編) 2011 『改訂新版 博物館概論』、放送大学教育振興会、pp. 304.

川口幸也 2011 『アフリカの同時代美術－複数の「かたり」の共存は可能か』明石書店、pp. 368.

栗田和明 2011 『アジアで出会ったアフリカ人－タンザニア人交易人の移動とコミュニティ』昭和堂、pp. 249.

川口幸也、竹沢尚一郎ほか7名共編
2010 『彫刻家エル・アナツイのアフリカ』読売新聞社・美術館連絡協議会、pp. 235.

栗田和明 2010 『マラウイを知るための45章 第二版』明石書店、pp. 295.

吉田憲司、内田篤呉、河野泰典編 2009 『アフリカの美－ピカソ、モディリアーニたちを魅了した造形』、MOA美術館学芸部編、MOA美術館、pp. 188.

川口幸也編 2009 『展示の政治学』水声社、pp. 391.

〔その他〕

ホームページ:

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/kaken/21242034>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 憲司 (YOSHIDA KENJI)
国立民族学博物館・文化資源研究センター・教授
研究者番号: 10192808

(2) 研究分担者

井関 和代 (ISEKI KAZUYO)
大阪芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 60073285
川口 幸也 (KAWAGUCHI YUKIYA)
立教大学・文学部・教授
研究者番号: 30370141
慶田 勝彦 (KEIDA KATSUHIKO)
熊本大学・文学部・教授
研究者番号: 10195620
亀井 哲也 (KAMEI TETSUYA)
愛知県立大学・日本文化学部・非常勤講師
研究者番号: 60468238

(3) 連携研究者

栗田 和明 (KURITA KAZUAKI)
立教大学・文学部・教授
研究者番号: 10257157
飯田 卓 (IIDA TAKU)
国立民族学博物館・先端人類科学研究部・准教授
研究者番号: 30332191